

皮膚血管炎について

鳥取大学共同獣医学科 獣医臨床検査学教室
教授 竹内 崇

はじめに

血管炎の多くは免疫複合体が血管壁に沈着し、さらに補体等が活性化されることで好中球の遊走が誘導される。血管壁に浸潤した好中球は、エラスターゼやコラゲナーゼなどの加水分解酵素を放出するため、血栓症、血管の閉塞、溶血、血管の壊死を発現することがある。

血管炎の原因は様々であるが、非免疫学的要因としては、細菌やウイルスの感染、播種性の真菌症、リケッチアのようなダニの感染などがある。大腸菌のような毒素を産生する細菌の感染では、皮膚の壊死を伴う重度の血管炎が発現することがある。その他、薬剤に対する過敏反応や、腫瘍細胞の直接的な浸潤による血管壁の壊死も起こり得る。免疫学的要因としては、全身性エリテマトーデスのような自己免疫疾患に伴う免疫複合体の血管壁への沈着である。限局性の皮膚血管炎は、ワクチン接種部位での発現が報告されているが、通常は皮下脂肪織炎を生じており、ほとんどは皮膚の壊死ではなく脱毛を呈する。急性血管炎の徴候は、通常、壊死と潰瘍からなり、圧力のかかる部位、肉球、耳介、四肢端などに起こりやすい。重篤度も様々であり、点状出血、斑状出血、出血性の水疱、膨疹、浮腫を呈する場合もある。慢性経過では、脱毛と瘢痕を認める。

治療は、血管炎の原因となる基礎疾患が明らかな場合は、基礎疾患の治療が最善となるが、多くの場合は原因の特定が困難である。感染症や敗血症の場合は、病原体を特定し適切な治療を行えばよい。薬剤に起因する場合は、直ちに薬剤の使用を中止するとともに、抗炎症用量のステロイドが提唱されている。免疫複合体が血管壁に沈着していると考えられる場合は、免疫抑制用量のステロイドまたは他の免疫抑制剤を使用する。



耳介に発現した皮膚の潰瘍



腹部の皮膚に発現した血管炎